

Title	中世文學と熊野
Sub Title	The Kumano (熊野) District in Japanese mediaeval litterature
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.2 (1961. 2) ,p.93(215)- 109(231)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610200-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610200-0093</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中世文學と熊野

松本芳夫

一  
熊野は交通の不便のために、長い間陸の孤島の觀があつたが、昨年紀勢線の鐵道貫通によつて、觀光客がおしよせ、非常なにぎわいを呈するにいたつた。それには理

由がある。日本に國立公園が多くあるけれども、吉野熊野國立公園に及ぶものはないというのが、私の持論で、というのは、他の國立公園の多くは、山なら山、海なら海、水なら水というように、その風光が一方的であるのに、吉野熊野國立公園は、山あり、海あり、水ありで、非常に變化にとんでいて單調でないこと、しかもそれらの山川は、單に眺めがいいというばかりでなく、神代か

らの物語や傳説にいろいろられていて、歴史的興趣をそそること、その上に温泉が湧出して、旅の疲れを醫すことができるという、まことに觀光地としては、この上ない要素をそなえているからである。

觀光地としての熊野は、昨今になつてやつとひろくしられるにいたつたが、しかし熊野が全國的意義を有したのは、今日にはじまつたことではない。すでに中世において熊野は熊野三山の信仰によつて全國を風靡したのであつて、『蟻の熊野詣』といわれたように、貴賤の參詣がさかんであつた。かつて私は、『古典と熊野』と題して、熊野が古典にどうあらわれているか、古典にあらわれた

熊野は、どういう性格の土地とされていたかをのべたことがあるので（大和文華、第二十三號）、その續篇の意味で、中世文學に熊野がどういう風にあらわれてゐるかを検したい。

## II

中世文學として最も特色があり、しかも熊野に關する記事の比較的豊富であるのは、戰記物語である。それらの記事は、熊野權現の信仰に關するものと、軍事に關するものとに大別することができるが、まず前者について言えば、熊野詣のことがある。

『保元物語』（卷之二）に、鳥羽法皇の熊野御參詣ならびに御託宣のことがあり、それによると、法皇は久壽二年の冬熊野に參詣して、本宮の證誠殿で祈念せられたところ、不思議なことがあつたので、巫を召してうらなわせると、明年の秋からならず崩御されるという權現の託宣が示され、その託宣のように、翌年法皇が崩御された。しかしここでは、

『法皇は權現御託宣の事なれば、御祈もなく御療治もなし、只一向御菩提の御勤のみなり。』

とあつて、權現に對する信仰が示されているけれども、熊野そのものについては、何もしるすところがない。

また平治物語には、平治の亂の一因をなした藤原信西が、熊野に參詣して切目の王子の前で、相人にゆきあい、『露命を草上に曝す』相のあることをつげられたこと（卷之二）、また鳥羽法皇が熊野參詣の時、那智山に淡海沙門という唐僧があつて、信西と問答したこと（卷之二）、また平清盛が熊野參詣の途中、源義朝等の舉兵の報をきいて、いそぎ引きかえしたこと（卷之二）などの記事があるけれども、これもまた熊野そのものについて語るところは、ほとんどない。

源平盛衰記には、後白河法皇の『熊野山那智御參詣事』がある（卷第三）。法皇の出家は嘉應元年六月十七日で、この參詣は『御出家の思出に』とあるから、おそらく嘉應元年十月の行幸のことであらうが、もしそれならば、

建春門院同道で、十五日に出發して、十一月十三日に還行されたのであるが、しかしこの記事においては、花山法王の參籠に附會した靈異談が主であつて、『三山順禮の後、瀧本に卒堵婆を立られたり』というのが、行幸についての具體的記事であると言つてよく、従つてまた熊野について何ものべていない。

そのすぐ次の項に、『熊野山御幸事』があつて、『平城

法皇、花山法皇、白河法皇、三山五箇度。堀河院、三山一度。鳥羽法皇、三山八度。後白河法皇、本宮三十四度、新宮那智十五度。』とあるが、今日の研究では、宇多法皇一度、花山法皇一度、崇德上皇一度、後白河上皇三十四度、後鳥羽上皇二十八度、後嵯峨上皇二度、龜山上皇一度といわれている。

花山法皇の參詣は正暦三年とされていて、大鏡に

『されば、熊野の道に、千里濱といふ所にて、御心地そこなはせ給へれば、濱づらに石のある枕にて、おほとのこもりたるに、いと近くあまの鹽やく烟のたち

のぼる心細さ、げにいかに哀におぼされけんな。

旅のそら夜半の煙とのぼりなば蟹のも

しほ火たくかとやみん

かかるほどに御驗もいみじうつかせ給ひて（下略）』

とあつて（卷之五）、行幸の途中の苦難が、わずかながらもしるされてあり、また増鏡には御嵯峨上皇の熊野行幸をしるして、

『御幸、熊野本宮に著かせ給ひて、それより新宮の川船に奉りてさし渡すほど、川の面おもてといふ所狭きまで續きたるも、御覽じなれぬさまなれば、院のうへ、熊野川せぎりにわたす杉船のへなみ

にそでの濡れにけるかな

その後も又程なく御幸ありしかば、女院も參り給ひけり。』

とあつて（第五、内野の雪）、本宮から川船で熊野川を下つて新宮にゆかれたことが叙せられていて、どの戦記物語もただ熊野權現に關する靈異談をあげているだけ

で、行幸や熊野について具體的に語るところはすこしもない。

行幸以外の熊野詣としては、平重盛すなわち小松殿の熊野詣事が、平家物語にも（卷第三）、源平盛衰記にも（卷第十一）みえるが、そのしるすところは兩書ともあまり變りがなく、彼が證誠殿の前で父清盛の惡逆無道をなげき、

『願くは子孫繁榮絶えずして、仕て朝廷に可<レ>交ば、入道の惡心を和て、天下の安全を得しめ給へ、榮耀又一期を限て、後昆恥に可<レ>及ば、重盛が運命を縮て、來世の苦輪を助給へ』

と熱心に祈念したこと（平家物語卷第三）、及びその祈念中と歸途岩田川のほとりで、ふしぎな事がおこつたことをのべている。

つぎに文覺上人の那智籠りについては、平家物語では卷第五に、源平盛衰記では卷第十八にしるされている。

その時のことを見物語では、

『先行の試に、聞ゆる瀧に暫うたれて見んとて、瀧本へこそ参けれ。頃は十二月十日餘の事なれば、雪降積り、つらゝいて、谷の小川も音もせず、峯の嵐吹凍り、瀧の白絲垂氷と成て、皆白妙に押立て、四方の梢も不<ニ>見分<ニ>。然るに文覺瀧壺に下浸り、頸際漬て（下略）』

荒行をなし、その荒行に際してたびたび大聖不動明王にたすけられるような奇瑞のあつたことがしるされていふ。なお源平盛衰記では、彼が伊豆に流される時の行程について、

『由良湊、田部<sup>たなべ</sup>の沖、新宮浦に船を著、熊野山を伏拜』

とあるけれども（卷第十八）、新宮は河口をなしているとは言え、その海岸は波の荒い砂濱であつて、船がつけられるような浦ではない。むしろ田部の浦、新宮の沖とすれば、さほど不自然ではない。

さらに平維盛の熊野參詣と入水のことが、平家物語に

も（卷第十）、源平盛衰記にも（卷第四十）みられるが、

他の場合においてもそうであるように、後者がはなはだしく冗長である。

平家物語では、岩田川から本宮に着いて、證誠殿の前でしづかに祈念して、父のことを回顧したり、後世を祈つたり、妻子の安穩を祈り、

『明ければ、本宮より舟に乗り、新宮へぞ被<sub>レ</sub>參け  
る。神座を拜み給ふに、巖松高聳嵐破<sub>ニ</sub>忘想夢<sub>ニ</sub>、流  
水清流、浪濤<sub>ニ</sub>塵埃垢<sub>ニ</sub>らん共覺えたり。飛鳥社伏拜  
み、佐野松原さし過て、那智御山に參給ふ』

とあつて、行程の描寫には難はないが、

『三重に漲落る瀧の水、數千丈迄攀上り、觀音の靈  
像は岩の上に顯て、補陀落山共謂つべし。霞の底に  
は法華經讀誦の聲聞ゆ、靈鷲山共申つべし。』

というのは、すこし大げさである。しかし

『抑權現當山に跡を垂させまし／＼てより以來、我  
朝の貴賤上下歩を運び、首を傾け、掌を合て、利生

に不<sub>レ</sub>預と云ふ事なし。』

とあるのは、那智山に對する當時の信仰をしめしたものと言つてよい。

さていよいよ三山の參詣もすんだので、濱宮という王子の前から舟にのり、山なりの島に漕ぎよせ、大きな松の木を削つて、『祖父太政大臣平朝臣清盛公法名淨海、親父小松内大臣左大將重盛法名淨蓮、三位中將維盛法名淨圓、年二十七歳壽永三年三月廿八日那智の沖にて入水す』と書きつけて、また舟にのり、沖に漕ぎでて、念佛をとなえながら入水し、從者の與三兵衛、石童丸もこれに従つた。

源平盛衰記では熊野までの行程もややくわしく、また岩田川で

岩田川誓の船にさをさして沈む我身も浮ぬる哉  
と詠じたとあり、本宮から那智までの行程については、

『本宮を出給ひ、備崎<sub>みさき</sub>より舟に乗り、時には苔路を  
さし新宮に詣給ふ。一夜通夜し給て、祈誓は本宮に

同事、翌日は明日香神藏に、暫念誦し給て、那智へぞ参給ける。佐野の濱路に著給へば、北は緑の松原影滋く、南は海上遙に際もなし。』

とあつて、平家物語の叙述と大體おなじであるが、ただ

海は僞事と云々。』

『備崎より舟に乗り、時には苔路をさし』というのが、ちがつてゐる。しかし『苔路をさす』と言えば、陸路を歩いたことになるけれども、本宮から新宮にいたるには、

いままではもつぱら河舟によつたのであるから、源平盛衰記は文章に變化を與えるために、こんな描寫をしたのであらうけれども、それがためかえつて眞實性を失うことになつた。

また維盛が入水の時、上陸して名跡を書いた島が、平家物語では『山なりの島』であるのに、源平盛衰記では

『金島』としてあるけれども、これも前者の方が正しい。なお源平盛衰記では、維盛入水の否定説をあげていて、その一つに、

『或説には、那智の客僧等是を憐て、瀧奥の山中に庵室を造りて隠し置たり、其所今は廣き畠と成て、彼人の子孫繁昌しておはす、毎年に香を一荷那智へ備ふる外は別の公事なく、故に爰を香膠こうはだと云と、入

あるが、この地方の傳説では、彼は入水しないで太地浦に上陸し、それより太田川に沿うて色川に入つたとつたえられてゐる。

なお平家物語には、維盛の遺子六代が高野で出家した後、熊野に參つた記事があるけれども（巻第十二）、濱宮から沖の山鳴の島を見渡して、父はいづくに沈まれたのかなどの感慨にふけり、渚に一夜をすごし、回向して都にかえつたことを叙しているにすぎない。

### 三

上述したように、熊野詣の記事は、その行程や、熊野の地理についての記述がいたつてとぼしく、わずかに維盛の場合においていささかみられるだけであつて、むしろ熊野權現に對する信仰と、靈驗談とがその中心をなし

て いる。しかしてこの信仰と靈験談とは、その他の場合においてもみられるのである。

まず平家物語の歎卷に、

『源氏重代の劍、本は膝丸蜘蛛切、今は吼丸とて、爲義の手より、教眞得て權現に進らせたりしを、申請けて源氏に與へ、平家を討せんとて、權現に申し給ひて、都に上り、九郎義經に渡してけり。義經特に悦びて、薄綠（すみどり）と改名す。其故は、熊野より春の山を分けて出でたり。夏山は綠も深く、春は薄かるらん。されば春の山を分け出でたれば、薄綠と名づけたり。此劍を得てより、日來は、平家に隨ひたりつる山陰山陽の輩、南海西海の兵共、源氏につぐこそ不思議なれ。』

『抑平家加様に繁昌せられることは、偏に熊野權現の御利生とぞ聞えし。其故は清盛未安藝守たりし時、伊勢國阿濃津より、舟にて熊野へ被參けるに、大なる鱸の、ふねへ跳入たりければ、先達申けるは、昔周武王の舟にこそ、白魚は躍入たるなれ。如何様にも、是は權現の御利生と覺候、可レ參とぞ申ければ、さしも十戒をたもつて、精進潔齋の道なれども、自調味して、我身くひ、家子郎等共にもくはせける。其故にや、吉事のみ打續て、我身太政大臣に至り、子孫の官途も、龍の雲に上るよりは猶速なり。九代の先蹟を越給こそ目出けれ。』

と言つてゐる(卷第一)。

平家は一方では嚴島神社に對してあつい信仰を有したと言つてゐるが、これは明かに熊野權現の利生をのべたものである。しかるに權現の利生は、單に源氏に對してのみでなく、平家に對しても大であつた。おなじく同書に、

『大將以下皆淨衣の上に鎧を著、「敬禮熊野權現、今度の合戦事故なくうち勝たさせ給へ」と祈請して、引驅け引驅け（下略）』

都へひきかえしたとあり（平治物語卷之一）、とくに重盛のごときは、嚴島へは一度も参詣しなかつたのに、熊野へは父とおなじく四度も参詣したといわれるから、いかにあつく歸依したかを知ることができる。

熊野權現に對する信仰と、その利生の最もいちじるしい例は、鬼界島流人の物語であろう。平氏討滅の陰謀がもれて、その處罰として、藤原成經、平康頼、僧俊寛の三人が鬼界島に流されたが、平家物語によると（卷第二）、丹波少將と康頼入道とは、もとから熊野信心のあつい人であつたから、この島に三所權現を勧請して歸洛のことを祈ろうとしたけれども、俊寛は不信の人でこれに従わ

ず、それで成經と康頼とは、島内をたずね廻つて、熊野に似たところを選び、ここが那智山、ここが新宮、ここが本宮などと命名して、毎日熊野詣の眞似をして歸洛の

ことを祈り、そのつど康頼は三所權現の前で祝詞を誦し、また通夜の時には奇瑞の夢をみたり、また千本の卒都婆をつくりて海に流したりしたが、その信心のかいがあつてやがて赦免に會つた。

源平盛衰記も大體おなじであるが、例によつてくどくどしい記事が多く、また平家物語では、卒都婆が安藝國嚴島大明神の社前の渚にうちあげられたとあるが、源平盛衰記では、新宮の湊にうちよせられ、浦人がこれを熊野別當に奉つたが、世を恐れたためか、披露がなかつたとし、また別の一本が嚴島についたとしている（卷第七）。いずれにしてもこの物語は、熊野權現の信仰によつてつよくいろいろられており、江戸時代の淨瑠璃『熊野權現鳥牛王』はこれにもとづいてつくられたのである。

#### 四

熊野に關する記事は、單に信仰のみでなく、軍事についてのものもすくなくない。さきにものべたように、熊野權現の利生は、源平のいづれにもあらたかであつた

が、これは熊野信仰のあつかつたためでもあるが、また兩方とも熊野に對してふかい關係をもつていたからである。

平家物語によると、源三位入道頼政が以仁王に舉兵をすすめた言として、

『若思召立せ給て、令旨を被り下給ふ物ならば、悅を成て馳參んずる源氏共こそ國々に多く候へとて申續く。ゝゝゝ、熊野には、故六條判官爲義が末子、十郎義盛とて隠て候。』

とあり（卷第四）、そのすすめに従つて、まず新宮の十郎義盛を召して藏人となし、行家と改名して令旨の御使に諸國に下されたが、これをもれ知つた熊野別當湛増は、平家重恩の身であつたから、平家にそむくわけにゆかず、『矢一つ射懸て、其後都へ仔細を申さん』とて一千餘人をひきいて新宮に向つたが、新宮、那智の大衆と戰つて敗れ、なくなく本宮に歸つた。この湛増も後には心變りして源氏に同心することになつたが（卷第六）、し

かし心變りするについては、思いなやんだらしく、

『平家へや參ん、源氏へや參んと思けるが、先田邊の新熊野に七日參籠し、御神樂を奏して、權現へ祈

誓申ければ、唯白旗に附との御託宣有しか共、猶疑をなし參せて、白き鷄七つ、赤き鷄七つ、是を以て權現の御前にて勝負をせさせけるに、赤き鷄一つも不勝、皆負てぞ逃にける。さてこそ源氏へ參んとは思定けれ。去程に一門の者共相催し、都合其勢二千餘人、二百餘艘の兵船に取乗り、若王子の御正體を船に乗せ参せ、旗の横上には、金剛童子を書奉て、壇浦へ寄するを見て、源氏も平家も共に拜し奉る。され共此船源氏の方へ附ければ、平家興覺きようさめてぞ被<sub>レ</sub>見ける』

とあつて（卷第十一）、湛増のひきいる熊野の水軍の向背が、壇浦の源平の勝負に大きな影響を與えたことがしのばれる。

『藤笠を肩にかけ、柿の衣に裝束して、熊野にて見習たれば、山伏の學をして』

海道に下つたとあるように(卷第十三)、細い描寫をしており、また平家物語では、行家の關東下向を聞いて新宮に押しよせたのが、本宮の熊野別當湛増であるのに、源平盛衰記では、平家の祈の師、本宮の大江法眼としてある。また同書には、

『熊野別當湛増法眼は、賴朝には外戚の姨智也。年來致<sub>ニ</sub>平家安穩祈禱<sub>一</sub>けるが、國中悉源氏に志を運、湛增一人背ても後難あり、今更平家をすてん事も昔の好を忘に似たり、如何あるべかるらんと進退思煩ふ』

とあつて、その苦衷から鬪鷄をなしたことと叙しているのは(卷第四十三)、平家物語とおなじである。

熊野と源平兩氏との關係については、平家物語に、

『爲義は腹々に、男女四十六人あり。熊野にも女房あり。娘をば、たつたはらの女房とぞ申しける。白

河院熊野御參詣の時、此山には別當ありやと御尋ありけるに、未だ候はずと申しければ、爭かざる事あるべきとて、別當の器を尋ねらる。爰にうい黨、(鈴木)すゝきの黨と申すは、權現摩伽國より、我朝へ飛び渡り給ひし時、左右の翅となりて、渡りたりし者なり。依レ之熊野をば、我儘に管領して、又人なくぞふるまひける。折しも權現の御前に、花備へて籠りたる山伏を、別當になすべき由、すゝき計ひ申しければ、我身其器量不足とて、固辭して申けれ共、重てひらに申しければ、押して別當になされけり。教眞是別當の始なり。別當は重代すべき者なり。聖にて叶ふべからず、妻を合せよとて、誰かはあるべきと尋ぬるに、爲義が娘、たつたはらの女房、よかるべしとて、教眞にぞ合せける。』

とか、或は

『湛増別當申しけるは、源氏は我等が母方なり、源氏の代どならん事こそ悦ばしけれ。』

とあり（劍卷）、また保元物語にも、

『この爲義は妾多かりければ、腹々に男女の子供二十人ぞありける。或は熊野の別當の娘になし、或は住吉の神主に養はせなどして、此彼にぞ置きける。』

と言つてゐる（卷之二）。ただ劍卷に教眞とあるのは行範の誤りであるらしく、また本宮の湛増が源氏とどういうゆかりがあつたか不明であるが、新宮の熊野別當が源氏と血縁關係のあつたことは、たしからしい。

一方の平家と熊野との關係はどうであつたか。平家物語には、清盛の弟の忠度について、

『薩摩守は聞ゆる熊野育の大力、究竟の早業にて坐ければ』

とあるけれども（卷第九）、彼がどこで、どういう育ちをしたか明かでない。ただ彼が後に、熊野別當の湛快の女をめとつたことが（吾妻鏡第四、文治元年二月十九日）、彼が熊野育ちということと、何等かの關係があるのかもしれない。

しかし平家と熊野との關係は、むしろ信仰の上においてふかくむすばれていたと言つてよい。清盛も重盛もたびたび熊野詣をしており、また上述したように、新宮の十郎行家が以仁王の令旨をもつて東國に下つたのを、いち早くかぎつけて、新宮那智の大衆と一戦して敗れた本宮の大江法眼は、『平家の祈の師』であり（源平盛衰記）、また維盛が熊野詣をして本宮に着いたとき、寂靜坊阿闍梨の庵室に入つたが、『此坊は故小松内府の師なれば』とあつて（同書卷第四十）、その關係のふかかつたことが示されてゐる。

## 五

熊野別當湛増が平家重恩の身でありながら、心變りしていよいよ源氏につこうと決心した時がありさまで、源平盛衰記では、

『熊野三山、金峰、吉野、十津河、死生不知の兵共を語集、若一王子の御正體を奉<sub>レ</sub>下、櫛枝に飭附、日月山端を出るが如し。旗紋、楯面には金剛童子を

畫に顯す、見るに身毛<sup>よだち</sup>堅けり。』

と叙しているが（巻第四十三）、この地方一帯は當時修驗道の中心であつて、『熊野金峰』とか、『熊野金峰山の僧徒』などの語は、戰記物語を通じてよくみられ、また上述したように、行家が以仁王の令旨をもつて東國に下つたときには、『熊野にて見習たれば、山伏の學をして』でかけたのである。

わが國の修驗道は、古代の山嶽崇拜と巫者の咒術宗教的要素とが、佛教の頭陀科撒や山嶽修行などと混和して發達したものと言つてよく、従つて修驗道の道場は、幽邃な靈地がえらばれた。熊野金峰は、まさしくそういう土地であつて、はじめ金峰が中心をなしたが、後には熊野が勢力を得、修行者はこの兩地の間を往來したのであつて、熊野から金峰にゆくのを順峰といひ、金峰から熊野へゆくのを逆峰といった。

この修驗道の發達によつて、熊野三山の信仰が全國にひろまり、いたるところに熊野神社が勧請され、中世の

信仰界を支配したのである。三山の衆徒の勢力のさかんであつたことは、彼等の向背が源平兩氏の運命に、至大な影響を及ぼしたことによつてもわかる。従てまた彼等は、當時の他の神人僧徒とおなじように、時として入洛し、駁訴することがあつたらしい。

扶桑略記によると、白河朝永保二年十月十七日に、熊野の大衆三百餘人が新宮那智の神輿を奉じて入洛し、尾張國館人が熊野大衆を殺害した状を訴え、また中右記によると、堀河朝長治元年九月二十五日に、紀伊の惡僧が熊野大衆と稱し、入洛して國司を訴え、或は吾妻鏡によると（第二）、養和元年正月五日から十九日にかけて、熊野山の惡僧等が關東の繁榮を祈り、平家をほろぼすためと稱して伊勢志摩兩國に亂入し、果ては伊勢神宮の宮殿を破壊したり、神寶をもちだしたり、山田宇治兩郷を襲うて人家を焼失し、資財を略奪するなど、天照大神の鎮座以來その例をみないと言われるような狼籍をなし、或は安貞元年二月十五日熊野衆徒が蜂起し、神體を奉じて

入洛しようとした（同書脱漏の卷）。

これらのことは、源平の合戦に直接關係のないためか、戦記物語にみえないけれども、當時の熊野三山の状態を知るためには、留意すべきことであろう。

## 六

戦記物語でも、太平記となると、時代がくだるために、熊野に關する記事はいくらかとぼしくなる。そのうちに

『大塔宮熊野落事』があり（卷第五）、また増鏡にも、

『宮は熊野にもおはしましけるが、大峯を傳ひて吉野にも高野にもおはしまし通ひつつ』

とあるが（第十九）、太平記によれば、實際は熊野までゆかなかつたらしい。すなわち大塔宮は磐若寺で唐櫃にかくれてやつと危難を脱し、いよいよ熊野へ落ちることになり、

『宮を始奉て、御供の者迄も、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半に責め、其中に年長せるを先達に作立、田舎山伏の熊野参詣する體にそ見せ』

て出發し、切目の王子について、その夜はよもすがら熊野三山に朝權の恢復を祈られたところ、しばらくまどろんだ時に、びんざら結うた童子が一人来て、

『熊野三山の間は、尙も人の心不和にして、大義成難し。是れより十津河の方へ御渡候て、時の至んを

御待候へかし、兩師權現より、案内者に被附進て候へば、御指南可仕候と申す』

という夢を見て、『是權現の御告也けり』とて、それに従つて十津川へ向かわれた。従つてこの記事では熊野そのものを知ることができず、ただ一行が熊野詣の山伏の姿をなしたとか、權現の御告を夢にみたということころに、熊野信仰のおもかげをうかごうことができる。なお康安元年七月から十月にかけて地震があり、とくに八月二十四日の大地震がはげしく、

『熊野参詣の道には地の裂ぬ所も無りけり。、、、、南方には、此大地震に、諸國七道の大伽藍共の破たる體を聞に、天王寺の金堂程崩れたる堂舍はなく、

紀州の山々程裂たる地もなれば、是外の表示には非じと、御慎有て、様々の御祈共を始らる。』  
という記事にも（巻第三十六）、單なる事實の報道以外に熊野に對する特殊な觀念が示されているようにおもわれる。

## 七

建武中興から吉野朝時代にかけての熊野の去就は一貫していない。概していえば、はじめ武家方であつたが、後には官軍についたらしい。

大塔宮の熊野落ちに際して、熊野別當定遍が關東方であつて、宮の熊野落ちをはばみ（巻第五）、また足利尊氏

が兩國の兵をひきいて入京したので、後醍醐天皇はふたたび叡山に臨幸され、山門におけるはげしい攻防戦もやや小康を得た時、熊野の八庄司が五百餘騎をひきいて上洛し、足利方に味方した（巻第十七）、その際八庄司の一  
人、湯河庄司は、

『爰に是ぞ聞えたる八庄司が内の大力よと覺えて、

人見人何れも偏執の思を成にけり。』

とあるように、大言壯語したのであるが、しかしその攻撃ぶりを、『熊野の人共の眞黒に裏つれて攻上けるを』とか、或は

『爰に是ぞ聞えたる八庄司が内の大力よと覺えて、  
長八尺計なる男の、一荒荒たるが、鎧の上に黒皮の  
鎧を著、五枚胄の緒を縮、半頬の面に朱をさして、

『紀伊國そだちの者共は、少さかなより惡處岩石に馴

て、鷹をつかひ、狩を仕る者にて候間、馬の通候はぬ程の嶮岨をも、平地の如くに存ずるにて候。ましてや申さん、此山などを見て、難所なりと思事は、露計も候まじ。威毛こそ能も候はね共、我等が手づから撓なめこづけ掠こづけて候物具をは、如何なる筑紫の八郎殿も、左右なく裏かゝする程の事はよも候はじ。將軍の御大事此時にて候へば、我等武士の矢面に立て、敵矢を射ば物具に請留め、斬らば其太刀長刀に取附、敵の中へわり入程ならば、如何なる新田殿なり共、やはか悚こらへ候べきと、傍若無人に申せば、聞人見人何れも偏執の思を成にけり。』

九尺計に見えたる檼木の棒を左の手に拳り、猪の目

透したる鉄の、歯の徑一尺計あるを、右の肩に振  
かたげて、少もためらふ氣色なく、小跳して登る形  
勢は、摩醯、修羅王、夜叉、羅刹の怒れる姿に不  
異。』

とか、或は『鬼歎神歎と見えつる熊野人』とか、或は

『其次に、是も熊野人歎と覺えて、先の男に一かさ  
倍て、二王を作損じたる如くなる武者の、眼さかさ

まに裂、鬢左右へ分れたるが、紺威の鎧に、龍頭の  
冑を縮、六尺三寸の長刀に、四尺餘の大刀帶て、射  
向の袖をさしかざし、後を吃と見て、遠矢な射そ。  
矢だうなにと云儘に、鎧づきして上ける』

などの叙述をみると、たとえ講談調の誇張があるにして

も、熊野人の勇壯さがしのばれる。

一體『熊野人』とか、『熊野育』という觀念は、古く  
あつたらしく、平忠度は、『熊野育の大力、究竟の早業』  
といわれたが（平家物語・卷第九）、熊野育ちの大力は、

このほかにもあつた。

靜憲法印が後白河法皇の勅使となつて清盛のところに  
のりこみ、互に問答して夜になつて歸つたが、その時法  
印を迎えてきたのが、金剛左衛門俊行、力士兵衛俊宗等  
であつた。この二人は兄弟で、

『熊野生立の者、十八歳にして五十人が力持たりけ  
る剛の者』

で、しかも

『美目貌嚴』して、西施が顏色にも過てあてやか  
なり。歸雁のつらをなせる柱の上に、白く細やかな  
手付、衣通姫の容貌潔し。去ば彼やさしき姿に  
も、五十人が力に勝て、一人して二段計大石を引け  
る事よと不思議也。』

と言われるような美男の力もちであつた。母は

『夕霧の板とて山上無雙の御子、一生不犯の女にて  
候し程に、不知者夜々通事有て儲たる子どもとぞ  
申侍し』

とあるから、御諸山神婚傳説をおもわせる話であるが、母が離山して行方知れずなつたので、祐蓮坊阿闍梨祐金が赤子の時から養育していたのを、靜憲法印が熊野詣の時に聞き知つて、祐金からこの二人をもらいうけ、都につれてきて侍となしたのである（源平盛衰記・卷第十一）。

熊野育ちには、こういう大力無雙のものが出たので、これが熊野信仰とも關聯して、『熊野育ち』という觀念がうまれたのであろう。

しかるに吉野朝時代になると、熊野は官軍方であつて、太平記によると、暦應三年四月一日脇屋刑部卿義助が勅命で四國西國の大將となつて下向する時、吉野を出發して、

『高野より紀伊の路に懸り、千里の濱を打過て、田邊宿に逗留し、渡海の舟を汰おきへ給に、熊野の新宮別當湛譽、湯淺入道定佛、山本判官東四郎、西四郎以下の熊野人共馬物具弓矢太刀長刀兵糧等に至まで、我不<sub>レ</sub>劣と奉りける間、行路の資卓散也。たけたくさんかく

とか（卷第三十四）、或は

『熊野には湯河庄司、將軍方に成て、鹿瀬蕪坂の後

に成なければ、熊野人共兵船三百餘艘さく汰立たてて、淡路の武島むしまへ送奉る。』

とあるように（卷第二十二）、熊野は吉野方であつた。

當時吉野朝は、陸奥の鎮守府と九州の征西府とを兩翼として策應しようとしだけれども、その連絡が北朝方に阻害されるおそれがあつたので、東は伊勢の大湊、西は和泉の堺をもつて、海上の連絡をはかつたのであつて、その任にあつたのが、熊野海賊といわれる、熊野の水軍であつたのである。

しかし熊野別當は新宮と本宮、後には田邊とに分れているのみならず、その地方の豪族も利害の衝突や勢力争いから時々内争もあつたらしい。

『湯川庄司心變して、後に旗を擧げ、熊野路より寄する共披露し、船をそろへて田邊よりあがるとも聞えければ』

に陣を取り、阿瀬川入道定佛が城を攻んとしける  
を、阿瀬川入道、山本判官、田邊別當、二千餘騎に  
て押寄せ、四角八方へ追散し、三百三十三人が首を  
取て、田邊宿にぞ懸たりける』  
というように（巻第三十五）、分争して吉野方として終始  
一貫した一致の行動がとられなかつたらしい。

## 八

中世文學と熊野と題したけれども、もつぱら戰記物語  
にあらわれた熊野についてのべたきた。しかし戰記物語  
は文學であるから、當時の世相や、思想や、信仰や、風  
俗などを知るにはよき史料であるけれども、物語がその  
まま史實としてみとめられるものではない。そこにあら  
われた熊野についての記事は、具體性にとぼしく、精確  
を缺いている。たとえば熊野詣は數度にのぼる記事があ  
るけれども、それをとつてみても、その行程のことき、  
はなはだ曖昧で、地理的知識を缺いており、従つて熊野  
の風物についてしるすところは至つてすくない。言わ

ば、戰記物語にあらわれた熊野は、信仰からみた熊野で  
ある。神秘的な靈域としての色彩のつよい熊野である。  
鎌倉時代の作とつたえられる那智瀧圖（根津美術館藏）が、  
飛瀑の上に大きな日輪をえがいて熊野權現を表象して  
いるが、それとおなじ觀念の熊野が、當時の文學にあら  
われた熊野であつた。

和歌にあらわれた熊野については、『古典と熊野』に  
おいてのべたので、ここでは再論しない。ただ鎌倉時代  
の歌集には、熊野に關して詠じたものが相當あつたの  
に、新葉和歌集にはほとんど一首もみられないのは、熊  
野の信仰が貴族の間に次第にうすれていつたためであろ  
うか。